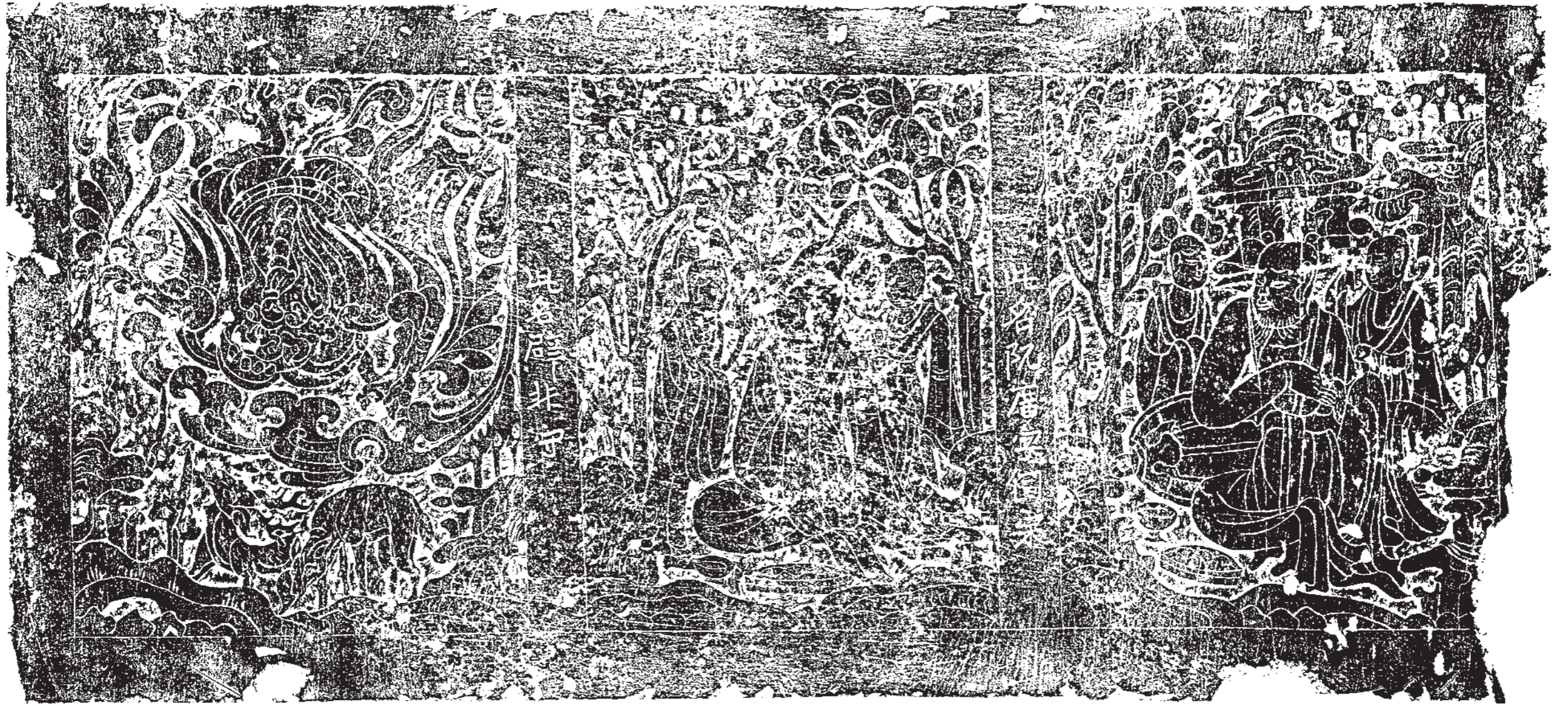


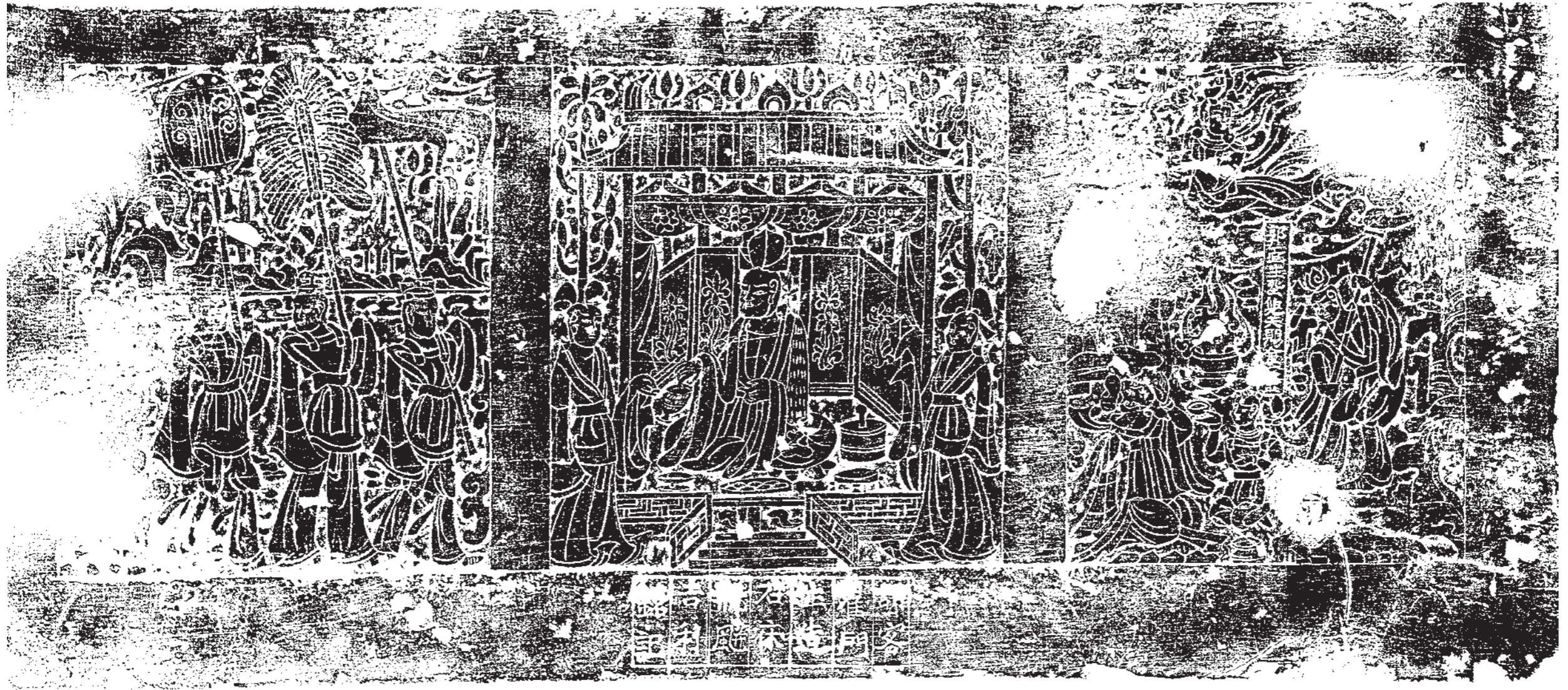
图版一 吳氏藏東魏武定元年翟門生石床 右側板（表）





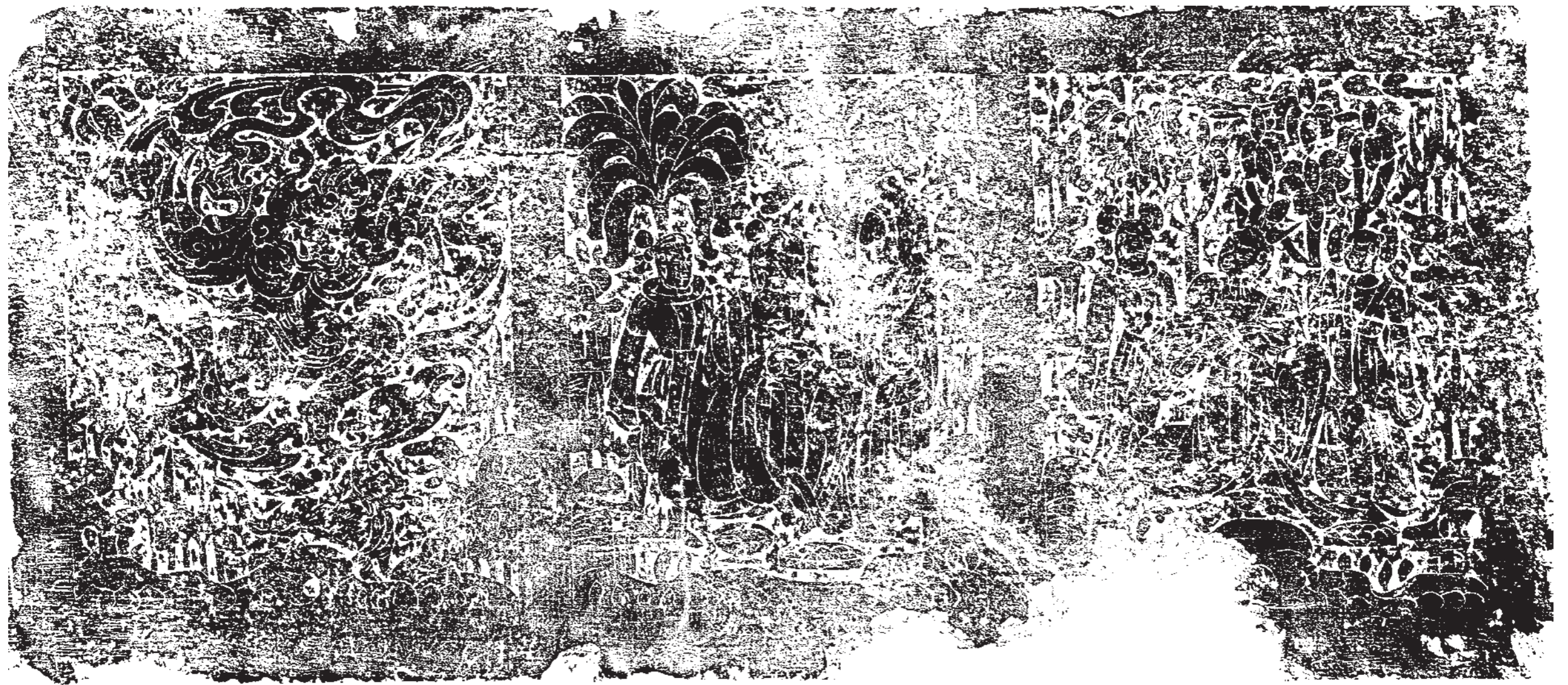
图版二 吳氏藏東魏武定元年翟門生石床 右側板(裏)





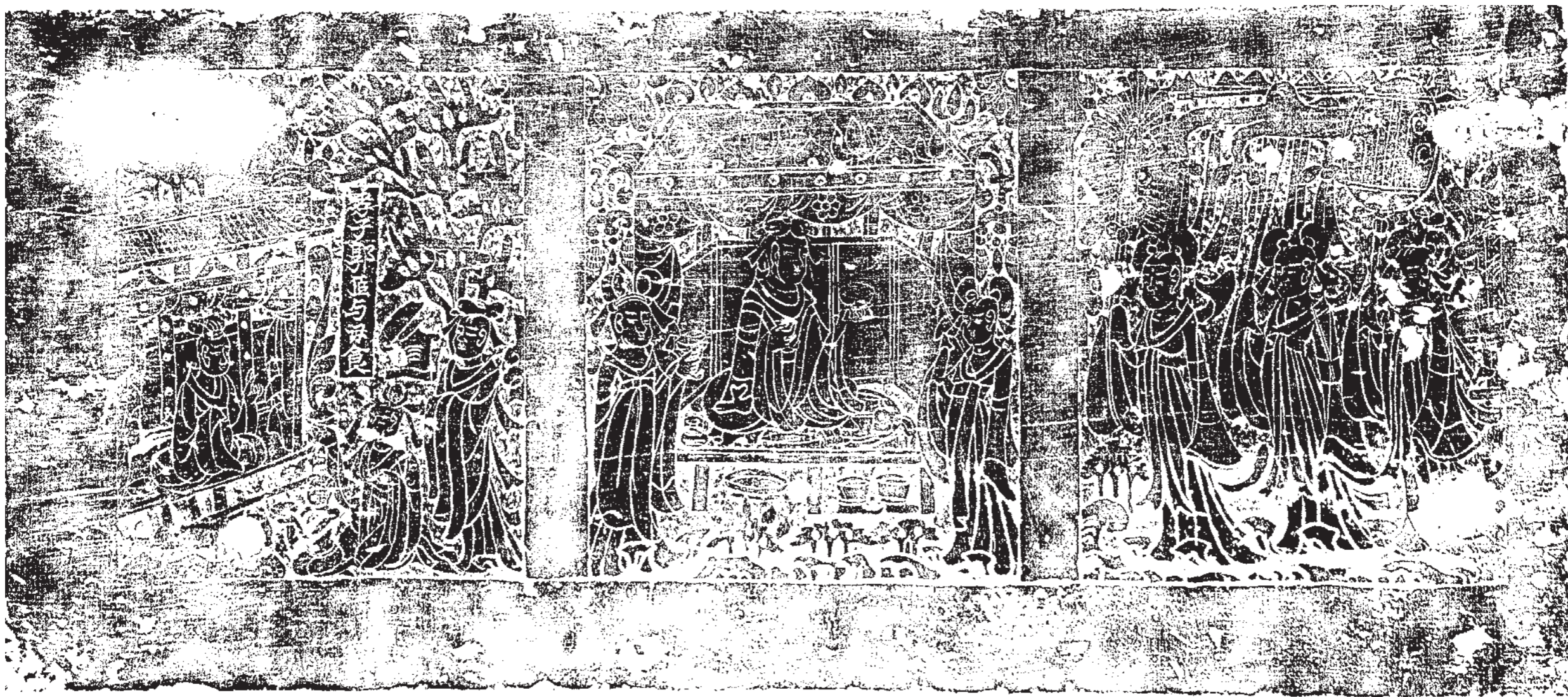
图版三 吴氏藏东魏武定元年翟门生石床 正面右板(表)





图版四 吴氏藏东魏武定元年翟门生石床 正面右板(裏)





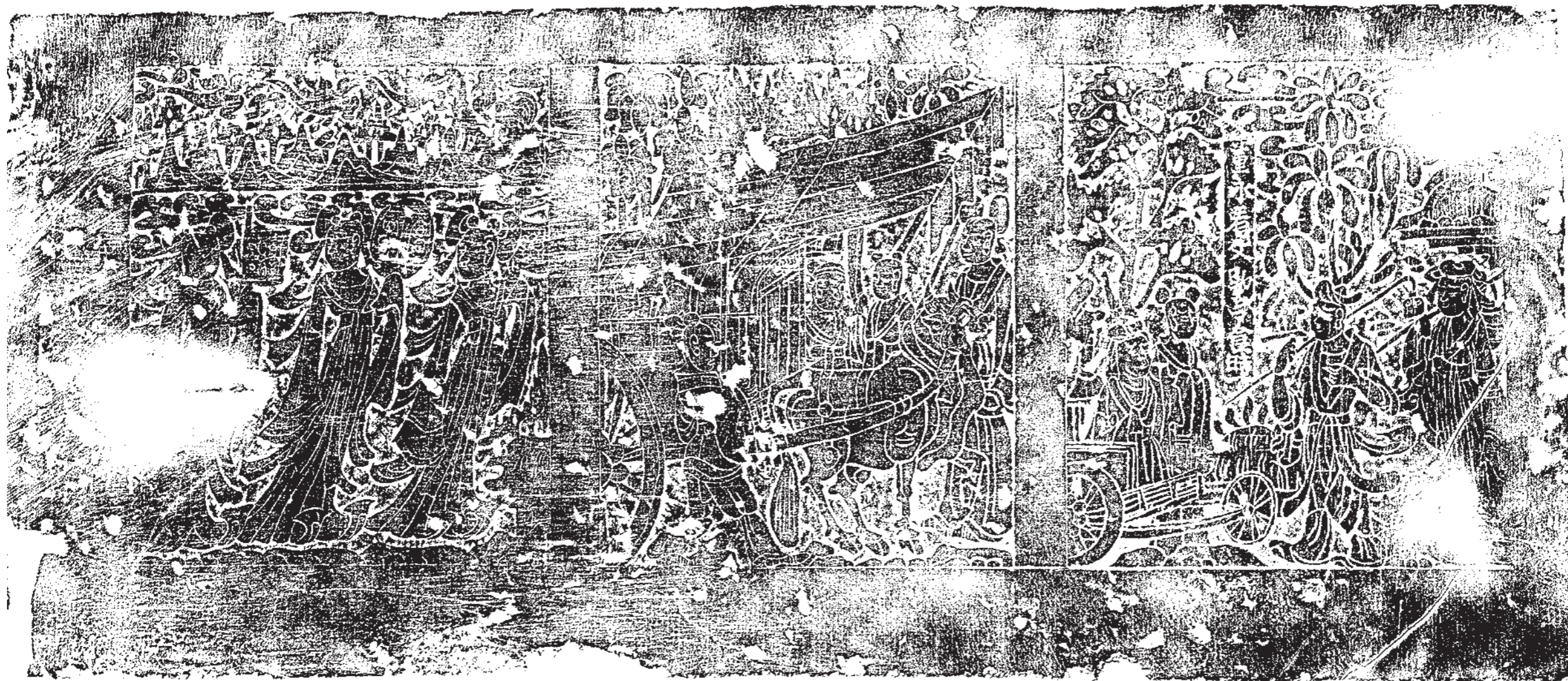
图版五 吳氏藏東魏武定元年翟門生石床 正面左板(表)





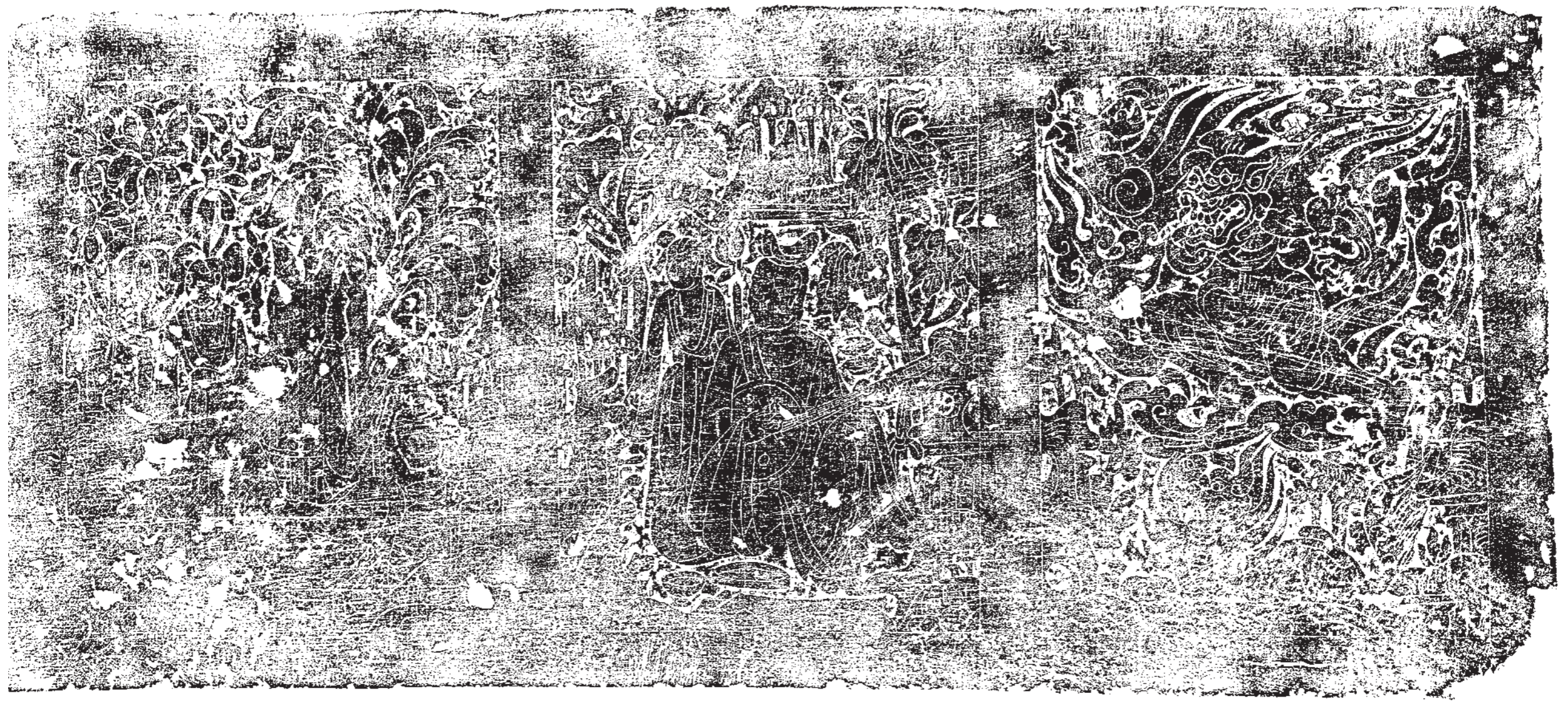
图版六 吴氏藏东魏武定元年翟门生石床 正面左板(裏)





图版七 吳氏藏東魏武定元年翟門生石床 左側板(表)





图版八 吳氏藏東魏武定元年翟門生石床 左側板(裏)



# 呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について

——翟門生石床の孝子伝図——

黒田 彰

〔抄録〕

小稿は、近時見出された深圳、呉強華氏蔵の東魏武定元（五四三）年翟門生石床囲屏の全図像を、呉氏の御好意により世界に先駆けて公開、報告し併せて、そこに描かれた孝子伝図三図四面（董黯図1、郭巨図2、董永図1）の内容を論じようとするものである。本石床は制作年時がはっきりしていることに加え、囲屏四枚の表裏全てに図像が描かれ、特に裏面の竹林七賢図は、北朝の竹林七賢図として内容の完備する、始めての遺品である点、世

界的に価値が高い。また、墓主の翟門生は、ソグド人と考えられ、鮮卑の北魏のみならず、ソグド人にまで孝文化の享受されていることは、異文化交流の中の中国文化のあり方を考える上で、種々の示唆に富む。本石床の紹介出来ることを、心から榮譽に思う。

キーワード 翟門生（てきもんせい）、石床（せきしょう）、孝子伝図（こうしでんず）、竹林七賢図（ちくりんしちけんず）、

鬼神図（きしんず）、ソグド人（そぐどじん）

石枕

石闕2

石門後架4

前架2

左檔

右檔

石門2

近年、深圳の呉強華氏が東魏武定元（五四三）年翟門生石床を入手された（深圳市金石芸術博物館蔵）。本石床は、東魏武定元年の年紀を有し、墓主を翟門生とする（諱は育、字は門生、元象元〈五三八〉年没〈墓誌〉）、由来の極めて明確な、北朝末期石棺床の優品で、

囲屏4



門楣

門框<sup>2</sup>

門檻

など計二十一点から成る、石床研究史上、非重に重要な新出の遺品である。墓主の翟門生は、趙超氏によれば、「一個外国人<sup>①</sup>」<sup>②</sup>、西域的丁寧、粟特等民族商旅首領<sup>③</sup>と言われ、本石床の歴史的、文化的、また、美術的、文学的な価値は、計り知れないものがあり、本石床の全貌、詳細は、近く深圳市金石芸術博物館によって公開されるが、同理事長吳強華氏は今般、世界に先駆けて日本における、本石床の紹介をお許し下さった。本石床にはその他、重要な価値が種々存しているが、一見して分かる本石床の特徴として、例えば本石床の囲屏部分の四石板に対し、それらの裏面全体に及び、画像の刻されている点が上げられる。この点は、北魏時代の石床として大変珍しい特徴で、本石床の囲屏四石の裏面には鬼神図、竹林七賢図が描かれる。そこで、吳氏の許可の下、小稿にあつてはまず、本石床の囲屏四面の全ての画像を、吳氏提供の拓本（写真）によって、報告することとした。巻頭の折込図版がそれである。巻頭の折込図版一―八に収録した、吳氏葦東魏武定元年翟門生石床の囲屏四面の内容は、次のようになっている。

図版一 右側板（表）

図版二 同（裏）

図版三 正面右板（表）

図版四 同（裏）

図版五 正面左板（表）

図版六 同（裏）

図版七 左側板（表）

図版八 同（裏）

本石床の各囲屏は、表裏共三面に区切られ、表面には墓主夫婦、侍者、孝子伝図、裏面には鬼神、竹林七賢図が描かれている。各囲屏の法量は、

右側板——縦四七、横一〇五、厚七糎

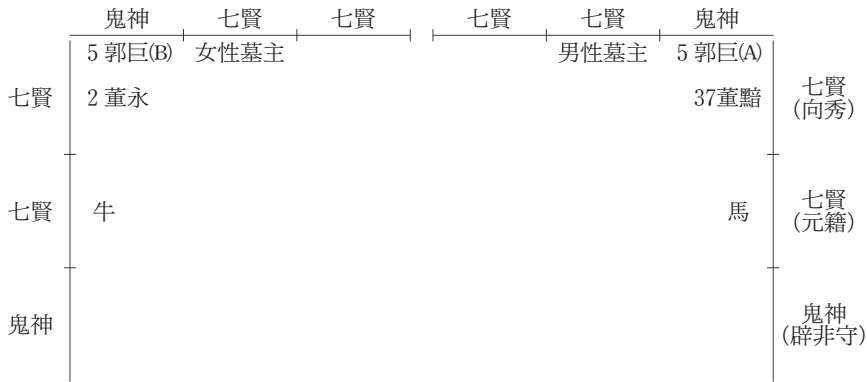
正面右板——縦四六・二、横一〇五、厚七糎

正面左板——縦四五・五、横一〇五、厚七糎

左側板——縦四五・八、横一〇六、厚六・五糎

である。図一は、囲屏四枚の表裏に描かれた内容を、概念図として示したものである（内側は、表、外側は、裏。空白は、侍者図）。表の四面には、墓主夫婦の二図（左右正面板の中央。男性墓主像の下に、「胡客翟門生造石床瓶甍吉利銘記」の題記がある）、馬と牛の二図（左右側板の中央、孝子伝図四図（37董黯〈数字は陽明本孝子伝の目次番号、右側板の左、5郭巨(A)(B)〈左右正面板の右、左端〉、2董永〈左側板の右〉、侍者の四図（空白部）が描かれる。裏面には、榮啓期と竹林七賢の八図及び、鬼神の四図が描かれる（右側板の右に、「此名〔向秀字子期〕」、中央に、「此名阮唐字伺宗」<sup>〔籍〕</sup>、左に、「此名辟非守」の三題記がある）。鬼神図は、右側板と正面右板の左、左側板と正面左板の右に、それぞれ位置している。小稿においてまず取り上げるのは、その孝子伝図四図である。裏面の榮啓期と竹林七賢図も、極めて貴重なものである。従来、七賢図として有名な遺品に、南京西



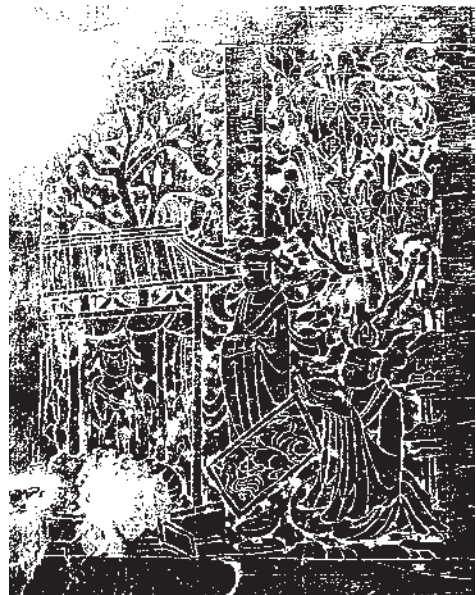


図一 翟門生石床の内容

善橋出土の画像などがあるが、それは南朝の遺品であるのに対し、翟門生石床の画像は、北朝の遺品として始めて知られる、完全なものであり、その内容については、機会を改めて述べてみたい。さらに囲屏裏面に彫られた鬼神図の遺品として知られるものに、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床などがあって、本石床裏面の鬼神図との比較検討は、なお今後の課題とすべきである。

本石床の表には、三図四面の孝子伝図が描かれている。右から、

- 37 董黯 (右側板左)
  - 5 郭巨(A)(B) (右正面板右、左正面板左)
  - 2 董永 (左側板右)
- の三図である。図二に掲げ



図二 翟門生石床 (董黯)

るのは、本石床の37董黯図である(題記「王奇日用三生由為不孝」)。董黯図に関してはかつて、次の三論攷において考えたことがある。

- I 「董黯贅語―孝道と復讐(一)」(拙著『孝子伝図の研究』II 1 3)
- II 「吳氏蔵北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用」(3)
- III 董黯図攷―吳氏蔵北魏石床(二面)の孝子伝図について―<sup>(6)</sup>

(『佛教大学文学部論集』100)

なるべく論旨の重複を避けながら以下、新出翟門生石床に見える董黯図(図一)の意義と問題を述べてみよう。まず本図の典拠となった、陽明本孝子伝37董黯の本文を示せば、次の通りである。

<sup>a</sup> 董黯家貧至孝。雖与王奇並居、二母不数相見。<sup>b</sup> 忽念籬辺。



因語曰黯母、汝年過七十、家又貧。顔色乃得怡悅如<sub>レ</sub>此何。答曰、我雖貧食<sub>レ</sub>完<sub>レ</sub>鹿衣<sub>レ</sub>薄、而我子与<sub>レ</sub>人无<sub>レ</sub>惡。不<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>吾憂故耳。王奇母曰、吾家雖富食<sub>レ</sub>魚又嗜<sub>レ</sub>饌、吾子不孝、多与<sub>レ</sub>人恐。懼<sub>レ</sub>懼<sub>レ</sub>其罪。是以枯悴耳。於是各還。奇從<sub>レ</sub>外婦。其母語<sub>レ</sub>奇曰、汝不孝也。吾問<sub>レ</sub>見董黯母、年過七十、顔色怡悅。猶其子与<sub>レ</sub>人无<sub>レ</sub>惡故耳。奇大怒。即往<sub>レ</sub>黯母家、罵云、何故譏<sub>レ</sub>言我不孝<sub>レ</sub>也。又以<sub>レ</sub>脚蹴<sub>レ</sub>之。婦謂<sub>レ</sub>母曰、兒已問<sub>レ</sub>黯母。其云、日々食<sub>レ</sub>三斗。阿母自不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>食、導<sub>レ</sub>兒不孝。黯在<sub>レ</sub>田中、忽然心痛、馳奔而還。又見<sub>レ</sub>母顔色慘々、長跪問<sub>レ</sub>母曰、何所不<sub>レ</sub>和。母曰、老人言多<sub>レ</sub>過矣。黯已知<sub>レ</sub>之。於是王奇曰殺<sub>レ</sub>三牲、且起取<sub>レ</sub>肥牛一頭殺<sub>レ</sub>之、取<sub>レ</sub>佳完十斤、精米一斗熟而薦<sub>レ</sub>之。日中又殺<sub>レ</sub>肥羊一頭。佳完十斤、精米一斗熟而薦<sub>レ</sub>之。夕又殺<sub>レ</sub>肥猪一頭。佳完十斤、精米一斗熟而薦<sub>レ</sub>之。便語<sub>レ</sub>母曰、食<sub>レ</sub>此令<sub>レ</sub>尽。若不<sub>レ</sub>尽者、我当<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>銚刺<sub>レ</sub>母心、用<sub>レ</sub>戟鉤<sub>レ</sub>母頭。得<sub>レ</sub>此言終不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>食、推<sub>レ</sub>盤擲<sub>レ</sub>地。故孝經云、雖<sub>レ</sub>日用<sub>レ</sub>三牲養、猶為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>孝也。黯母八十而亡。葬送礼畢、乃嘆曰、父母讐不<sub>レ</sub>共戴<sub>レ</sub>天。便至<sub>レ</sub>奇家<sub>レ</sub>斫<sub>レ</sub>奇頭、以祭<sub>レ</sub>母墓。須臾監司到縛<sub>レ</sub>黯。々乃請以<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>墓別<sub>レ</sub>母。監司許<sub>レ</sub>之。至<sub>レ</sub>墓啓<sub>レ</sub>母曰、王奇横苦<sub>レ</sub>阿母。黯承<sub>レ</sub>天士、忘<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>己力、既得<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>讐身。甘<sub>レ</sub>菹醢、甘<sub>レ</sub>監司見縛。應<sub>レ</sub>當備<sub>レ</sub>死。挙<sub>レ</sub>声哭。目中出血。飛鳥翳<sub>レ</sub>日、禽鳥悲鳴。或上<sub>レ</sub>黯臂、或上<sub>レ</sub>頭辺。監司具如<sub>レ</sub>状奏<sub>レ</sub>王。々聞<sub>レ</sub>之嘆曰、敬<sub>レ</sub>謝孝子董黯。朕寡徳統<sub>レ</sub>荷万機。而今凶人勃逆。又應<sub>レ</sub>治罪、令<sub>レ</sub>勞<sub>レ</sub>孝子助<sub>レ</sub>朕除<sub>レ</sub>患。賜<sub>レ</sub>金百斤、加<sub>レ</sub>其孝名也

図二は、画面右に、跪いて食器を捧げる王奇（左向き）、画面左に、

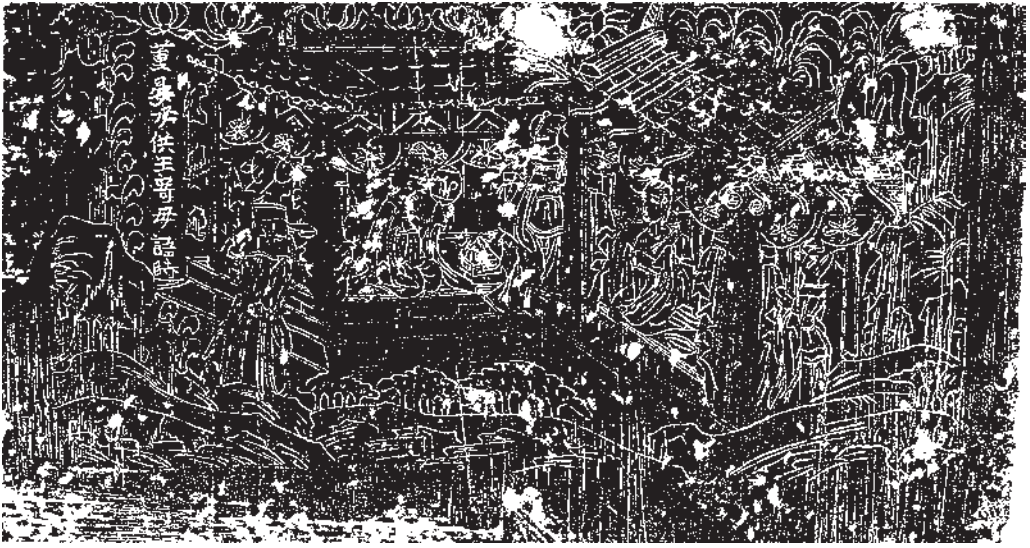
屋内に坐す母（右向き）、両者の間に、長方形の盤に盛った三牲を描く。画面中央に立つ女性（左向き）は、侍者であろう（その三牲また、題記のことは後述）。本図は、陽明本孝子伝fに言う、己れの母に対する、王奇の三牲強要の場面を描いたものに相違ない。

ここで、上記拙稿I、II、IIIを含めた、孝子伝図の董黯図の研究史のことを、簡単に纏めておきたい。暫く前まで董黯図と言えば、在米国の次の三点が知られるに過ぎなかった。

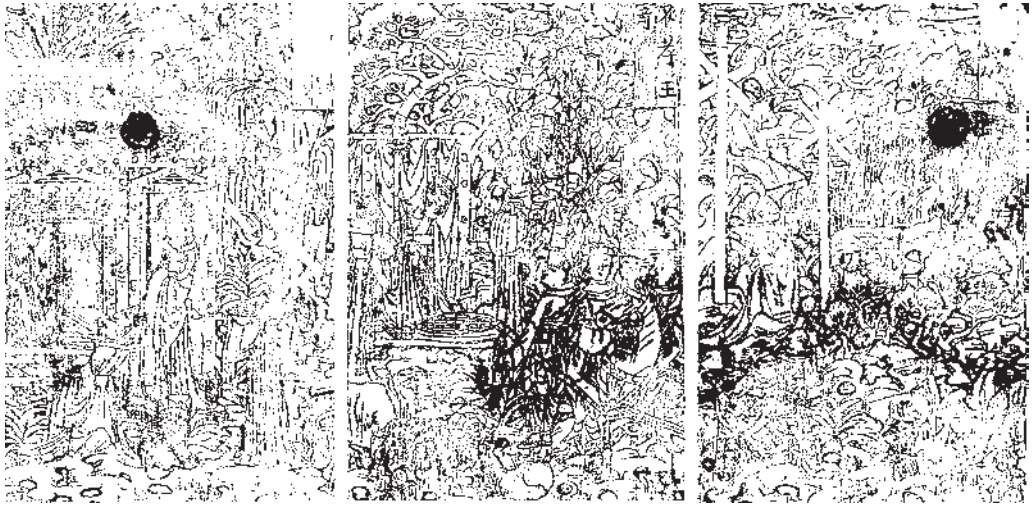
- (1) ポストン美術館蔵北魏石室（右側下）
- (2) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床（正面左板）
- (3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺（左幫）

図三は、(1)、図四は、(2)の董黯図を示したものである。まず(1)（図三）について、それが陽明本孝子伝37董黯条に基づく、董黯図であることを喝破されたのは、西野貞治氏による昭和三十一（一九五六）年の名論攷、「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」であった（船橋本には、董黯と王奇を兄弟とする等、漢代の孝道に照らし合わせて致命的ともすべき、本文上の欠陥が存する）。西野氏は、図三の題記に見える「董晏」を「董黯」の宛字とし、画面左に、柱を背にして立つ男性を王奇（左向き）、団扇を手に坐す女性をその母（右向き）、王奇の左の「盤乃至盒の如きものの上に盛られたのは大食を強いられた三牲で」とあると見て、それを、陽明本孝子伝37董黯条のf以下、王奇による母への三牲強要の場面に外ならないことを研究史上、始めて明らかとされたのである。氏の業績として取り分け重要な点は、例えば図三を説明するような、王奇の三牲強要を含む、孝子伝の董黯





図三 ポストン美術館蔵北魏石室（董黯）



(A)

(B)

(C)

図四 ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床（董黯）



の物語というものが、中国において疾くに滅び、その図像を解明し得る文献としては世界的に唯一、陽明本孝子伝の本文しか残されていないことを、明確に指摘された点が上げられる。

西野氏に次いで、(2) (図四) を世に出されたのは、昭和四十四（一九六九）年の長廣敏雄氏の書物である。即ち、西野氏の論攷時には、(2) (図四) は、未だ世に知られてはいなかった。さて、長廣氏の業績は、(2)を紹介すると同時に、「不孝王寄」の題記を手掛かりとして、図四の中央(B)を、董黯図と認定されたことである。<sup>11)</sup>ところが、氏は、西野氏の取り上げた(1) (図三) を偽刻として斥け、比較考察の対照としなかったため、図四の(A)、(C)を董黯図とは別の二図と見て、図三、図四の関連は、不問に付される結果となった。

拙稿Ⅰは、上記のような研究史を踏まえ、まず(1) (図三) を外的、内的に真刻と確認した上で、図三、図四の密接な関連を認め、図三右を図四(A)と同じ董黯の家、図三左を図四(B)と同じ王奇の家と認定して（陽明本孝子伝 a 以下による）、図四(A)(B)こそは、研究史的に西野氏の主張された、王奇による三牲強要を伴う董黯図が（陽明本 f 以下による）、実際に出現したことを意味するものと位置付けた。同時に図四(C)は、陽明本 g 以下による、(A)(B)と一連の董黯図と捉えるべきもので、また、図三の題記、

董晏母供<sup>(奇)</sup>王寄母<sup>(黯)</sup>語時

は、陽明本 b 以下を典拠とするが、陽明本 a、f に基づく図三、図四(A)(B)の場面とは一致しないことを論じる。

拙稿Ⅱは、二〇一二（平成二十四）年三月、私が始めて中国で目に

した、第四の董黯図を扱う。所蔵者は、呉強華氏で、私が呉氏と出会う切っ掛けとなった、とても思い出深い遺品である。呉氏は、その後も孝子伝図の蒐集に努められ、後掲(4)の当図を含め、二〇一二年以降、管見に入った董黯図としては、以下のようなものがある。

- (4) 呉氏蔵北魏石床（正面左板左。後掲図六）
- (5) 呉氏蔵翟門生石床（右側板左。本図〈図二〉）
- (6) ヴァージニア美術館蔵北魏石床（正面左板中央）
- (7) 呉氏蔵北魏石床（三枚）（右側板）

拙稿Ⅱの扱った(4)また、(6)は、(5)の本図（図二）と関係が深いので、後述に従うこととし、(7)を扱う拙稿Ⅲを先に説明する。

図五は、(7)の董黯図を示したものである。<sup>14)</sup>図五は、五つの場面(A)、(B)、(C)左上、下、右上)を有する董黯図で、それらの五場面は従来、全く知られることのなかったものばかりの、画期的な遺品である。その内容を簡単に説明すると、(A)(B)は、塀の外を通り掛かった黯母を奇母（邸内）が呼び止め、別れる場面を描く。これは、陽明本孝子伝 a、b を場面化したもので、その二場面は、両母が対話したことを表わしている（陽明本 b）。そして、図五(A)(B)こそは、図三の題記「董晏母<sup>(奇)</sup>供<sup>(黯)</sup>王寄母<sup>(黯)</sup>語時」が、その存在を予言していた場面の出現を意味する。また、図三左右、図四(A)(B)に対比的に描かれた、董黯の家と王奇の家は、図五では、(C)の下に小さく、(A)(B)に大きく、象徴的に描かれていることが、物語に対する図五の理解の深さを示している。図五(C)は、田で耕作する董黯（左上。陽明本 d）、その隙を狙って、董黯の家へ乗り込み、黯母に暴行を働く王奇（下。陽明本 c）、母の異常を察知





(C) (B) (A)

図五 呉氏蔵北魏石床（三枚）（董黯）

し、家へ走り戻る董黯（右上。陽明本e）の、三つの場面を描く。この三場面も図五の出現により、始めて世に知られるに至った図柄である。すると、(7)（図五）は、三牲強要の場面を含まないし、(2)の図四(C)董黯墓参の場面を加えると、董黯図には、七つの図柄が存することになり、その事実は、例えば八つの場面を擁する寧夏固原北魏墓漆棺画左幫の舜図に次いで、北魏時代の孝子伝図粉本に関する、或る見方を齎すものである。列女伝図と同様、北魏時代の孝子伝図に粉本のあったことは最早、疑いを容れないが、それは一人一図といったような単純なものではなかっただろう。一人一人に複数の図像と、さらには本文を伴う、可成り大掛かりな画巻だったのではないか。ひよっとすると、それは、例えば董黯図巻といった風に、孝子一人ずつの画巻に分かれていたことも、十分に想定される。拙稿IIIは、新出(7)の董黯図に見える、新たな五場面の出現をめぐって、研究史におけるその画期的な意義を報告する。

## 二

拙稿IIは、(4)呉氏蔵北魏石床の正面左板左に描かれる董黯図を、始めて紹介したもので、私はその図像と巡り合った経緯は、前述した。その(4)の董黯図と、その後に出現した(5)ヴァージニア美術館蔵北魏石床、正面左板中央に描かれる董黯図との二つの図像を、図六、<sup>15</sup>図七として掲げよう。<sup>16</sup>図六、図七と本図（図二）とは、一見して図四（2）(B)の三牲強要の場面の系譜に属することが明らかで、それらは、例え





図六 呉氏蔵北魏石床（董黯）



図七 ヴァージニア美術館蔵北魏石床（董黯）

ば図四(C)や図五(7)が、物語のストーリー進行に添った図柄の展開を示すのとは対照的に、西野氏が指摘された、図三(1)左や図四(2)に描かれる、三牲強要の場面への董黯図の集約を示すものである。それにしても、西野氏、長廣氏の研究や拙稿Ⅰの後、呉氏蔵の三遺品を中心として、(4)―(7)の董黯図が出現したことは、孝子伝図の研究史上、驚くべきことと言わなければならず、北魏時代における董黯図の爆発的な流行を物語るものであろう。取り分け本図(図二)や図六、図七の出現は、三牲強要の場面の人気が高かったことを表わしている。

図六は、本図(図二)にも酷似するが(侍者はいない)、なお図四(B)を忠実に再現したかの観がある。画面の右に立つのが王奇である(左向き)。画面の左、屋内に坐すのが母である(右向き)。二人の間には、丸い盤に盛った三牲が置かれている。王奇は、顔を怒らせ、右手を剣の束に懸ける。母は、左の掌を王奇に向け、制止の状を示している。王奇による三牲の強要と、母の拒絶が描かれているのである。図七は、左右が反転している。即ち、画面右に、屋内に坐す母(左向き)、中央に、跪いて両手で食器を捧げ持つ王奇(右向き)、両者の間に同じく、丸い盤に盛った三牲を描く。画面左には、紐飾りの下がる剣を、高々と捧げて立つ、男性の侍者がいる。王奇が食器を捧げることや、母が袖を上げて嘆きの様を表わすことなどは、当図(図七)と本図(図二)とが、共に高い一致を見せる点として、特に注目すべきである。

図三、図四の題記については、先に触れたが、図六また、本図(図二)、図七にもそれがある。三つの題記を併せて示せば、次の通りで



ある。

- (1) 王寄日殺<sup>(奇)</sup>三生<sup>(牲)</sup>猶為<sup>(牲)</sup>不孝<sup>(牲)</sup> (図六)
- (2) 王寄日用<sup>(奇)</sup>三生<sup>(牲)</sup>由為<sup>(牲)</sup>不孝<sup>(牲)</sup> (本図 図二)
- (3) 此是王寄日用<sup>(奇)</sup>三生<sup>(牲)</sup>母食時 (図七)

(1)―(3)の題記は、三者の図柄同様、一系統と見做せる程よく似ており、同一の粉本から出たことを窺わせる。中で、古形を保つのが(1)であり、それが陽明本孝子伝——部の直接的な引用と考えられることは、拙稿IIにおいて指摘した。(2)は、殺―用(3)も同じ)、猶―由の文字異同があるが、前者は、陽明本また、孝経に見え、後者は、音通による変化であろう。(3)は、やや崩れが目立ち、特に「此是」「母食時」が加わっているが、「猶為不孝」を欠く、当遺品(6)は、「是此」に見る如く、題記で図像を説明する傾向が顕著に認められ、特に「母食時」が加わっていることは、当図(図七)や本図(図二)の王奇が、母に食器を捧げる姿に描かれることと密接に関連し、当図の図柄を、母に食事を供養するものと見て、それを説明しようとする付加と捉えることが出来る(後述、郭巨、董永図参照)。一方で、「猶為不孝」の四字を落としていることは、董黯の物語の「馬鹿息子話」(西野氏)としての本貫を見失わせ、王奇による母への三牲強要の図柄を、単なる母への孝養図と誤解させる契機を孕むのである。

さて、(1)(図三)に関し、陽明本孝子伝を用いることによって、それが董黯図に外ならないことを始めて闡明した西野氏は、この孝子伝の記述によつて左半面の構図を説明すると、室内左手に右を向いて坐するのは王奇の母で、手にするのは所謂団扇であ

る……その前に見える盤乃至盒の如きものの上に盛られたのは大食を強いられた三牲で、王奇の母はその前に前方を向いて立ち顔を母に向ける王奇に対し、扇面によつて顔を障つて困頓の状を呈するのである。ところで此の三牲は王侯の礼で庶人のなし能る所でなく、孝経の言う所も喩である事は言う迄もない。例えば太康起居注(御覽八六三)に「石崇崔亮母疾、日賜清酒粳米各五升、猪羊肉各一斤半」とある如く、重臣の母が病篤くして漸く二牲を賜つているに過ぎぬ。そして、此の説話で三牲を羅列するのは、いわば此の説話は、貧と富、孝と不孝を甚だ対照的に用いているので、特に不孝息子の愚かさを誇張した部分として挿入したもので、朝も昼も、又晩もという御馳走攻めの表現からもその目的はこの説話の読者に、その息子のあまりにも愚かな不道德性にあきれて哄笑することを期待したものであつたかと思う。そしてこの説話は後の我國の馬鹿息子話にも一脈相通するものがあり、恐らくは民間に語り伝えられたかと思われるが、ある時期に笑話として仮空に作為されたものであることは、広くは伝わらなかつた事によつて想像される

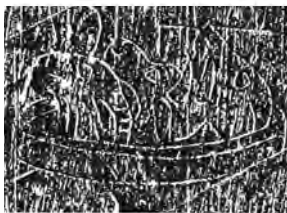
と述べて、王奇と母の間の盤上に盛られたものが、牛羊豕(猪)の三牲(孝紀紀行章)であろうことを指摘された<sup>18)</sup>。さらにその三牲が、(一)(図四(B))において、極めて具体的に描き出されていることを発見したのは、長廣敏雄氏で、長廣氏は、

画面前方左寄りに、牛と羊と猪がならんでいるのは、三牲を意味することうたがない。猪は小豚のようで、四肢を上にはむけて、





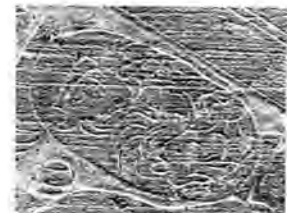
(2)



(4)



(5)



(6)

図八 三牲一覽

(2)(4)の牛に代わり、鶏が入っているのである（また、(5)(6)の右は、犬のようにも見える）。このことは一体、何を意味するのであろうか。

西野氏が牛、羊、豕（猪）を三牲とされたのは、孝経孔安国伝を始めとする正統且つ、古典的な解釈とすべく、また、三牲を太牢、牛を除いた二牲を少牢とも称する（春秋公羊伝桓公八年冬何休注

ひっくりかえっている

とされたのである。<sup>19)</sup>長廣氏の発見は大変、重要で、図中に実際、三牲

の姿を描き出すことは、新出の(4)、(5)、(6)三例の董黯図全てに確認さ

れることが、そのことを証明している。図八は、(2)（図四）、(4)（図

六）、(5)（本図〈図二〉）、(6)（図七）の三牲の部分を一覽として示し

たものである。図八の(4)(5)(6)などを見ると、かつて西野氏の、「盤乃

至盒の如きものの上に盛られたのは大食を強いられた三牲で」と言わ

れたことが、六十年の時を経て、そのまま嵌る図像となつてい

ると、驚きを禁じ得ない。ところで、図八を通覧すると、それら四例

の三牲の内容に、微妙な異同が生じていることに気付く。即ち、四例

のそれぞれ左から、

(2)牛、羊、豕

(4)羊、牛、豕

(5)鶏、豕、羊

(6)豕、鶏、羊

となつていて、(2)(4)は、同じ牛、羊、豕の所謂三牲だが、(5)(6)には、

等。牢は、御馳走の意)。そして、(2)(4)の図柄は、正しくその西野説に合っている。ところが、牛に代わつて鶏の描かれる、(5)(6)の鶏に着目すると、例えば『漢語大詞典』「三牲」に牛、羊、豕を、「俗謂三牲」とする説と共に、

猪・魚・鶏。俗謂三小牲。

とする、興味深い一説が目止まる。この説は唐、韓愈の「故太学博士李君墓誌銘」（昌黎先生集三十四所収）に、

五穀三牲……豚魚鶏三者、古以養老

とある所までしか溯れないが（李君は、長慶三（八二三）年没、少なくとも唐代以前、鶏を含む小三牲というものが、成立していたことは間違いない。さて、このことは、「王侯の礼で庶人のなし能る所

は間違いない。さて、このことは、「王侯の礼で庶人のなし能る所

念としてなお存続する一方で、それが民間にも入り、その牛、羊を魚、

鶏に代えた、より庶民的な小三牲が成立、展開していった事実を物語るものである。そして、(5)(6)には、小三牲の鶏は描かれているが、魚

は未だ描かれていない。すると、北朝末期の(5)(6)は、唐代に「豚魚

鶏に代えた、より庶民的な小三牲が成立、展開していった事実を物語る

ものである。そして、(5)(6)には、小三牲の鶏は描かれているが、魚

は未だ描かれていない。すると、北朝末期の(5)(6)は、唐代に「豚魚

鶏に代えた、より庶民的な小三牲が成立、展開していった事実を物語る



「鶏」の小三牲が確立する以前、民間において牛、羊、豕の三牲（大三牲）が変貌を遂げる、その過程を如実に示す、非重に重要な図像資料と位置付けることが出来る。さらに何故、牛に代わって鶏が入って来るのかという問題をめぐっては例えば古来、六牲（馬、牛、羊、豕、犬、鶏）、という犠牲の概念もあって（周礼天官膳夫注）、(5)(6)の右が犬のようにも見えることなどを含め、北魏時代から唐代にかけての、三牲の観念の変遷を辿り直すことが、なお今後の課題となるだろう。ともあれ、図八の(4)(5)(6)などが、文献資料の欠を補って余りある、貴重な図像資料の出現を意味することは間違いないが、それは、研究史的に見れば前述、西野説の深化と捉えられることを、最後に断わっておきたい。

三

図九は、翟門生石床正面に描かれた、二図の郭巨図を併せ示したものである。(A)は、正面右板右、(B)は、正面左板左。両図には、

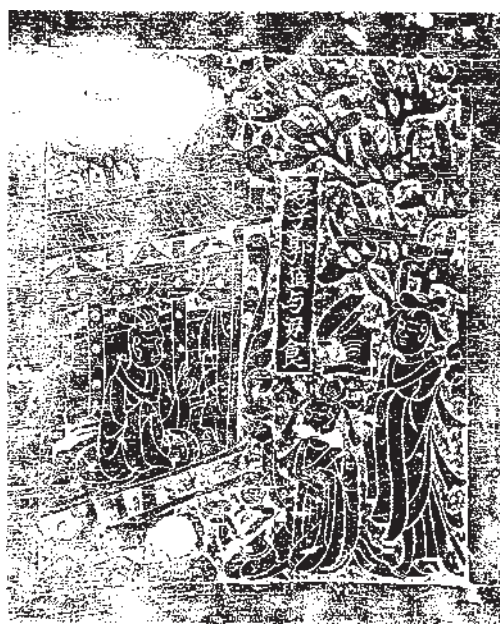
・孝子郭巨与母食 (A)

・郭巨生瘞兒天賜金一釜 (B)

の題記がある。(A)の画面右には、筆を捧げて立つ妻、食器を捧げて跪く、郭巨と子供（共に左向き）、左には、屋内に坐す母（右向き）を描く。(B)の画面右には、甬を両手に握り、穴を掘る郭巨（左向き）、中央には、跪く子供（左向き）、左には、左手を上げながら天を仰いで跪く妻（右向き）、上には、下半身を横たえ、上半身を立てて振り



(B)



(A)

図九 翟門生石床（郭巨）



返る天女（左向き）、その下には、空中に浮かぶ黄金の釜を描く。この天女と釜が特異である。(A)、(B)の順序については、後述する。本図の典拠となった、陽明本孝子伝5郭巨条の本文を示せば、次の通りである。

家貧養母

郭巨者、河内人也。時年荒。夫妻昼夜勲作、以供養母。其婦忽然生一男子。便共議言、今養此兒、則廢母供事。仍掘地埋之。忽得金一釜。々上題云、黄金一釜、天賜郭巨。於是遂致富貴、転孝蒸々。賛曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同心、殺子養親。天賜黄金、遂感明神。善哉孝子、富貴榮身

二〇一二年に私が呉氏の知遇を得る以前、管見に入っていた郭巨図としては、次のような十一例の遺品がある。

- (1) 江蘇徐州仏山画像石墓
- (2) 寧夏固原北魏墓漆棺画
- (3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺
- (4) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石棺
- (5) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
- (6) C.T.Loo 旧蔵北魏石床
- (7) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床
- (8) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床
- (9) 鄧県彩色画像象軛
- (10) 襄陽賈家冲画像象軛墓
- (11) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶

その後、本図（図九）を始めとする、呉氏蔵遺品四点を含めて、次の

八例の郭巨図が出現を見た。

- (12) 呉氏蔵北魏石床
- (13) 呉氏蔵北魏石床脚部
- (14) 呉氏蔵翟門生石床（本図）
- (15) ヴァージニア美術館蔵北魏石床
- (16) 安陽固岸東魏石床
- (17) 襄陽清水溝M1南朝墓画像軛
- (18) 襄陽柿庄M15南朝墓画像軛
- (19) 呉氏蔵北魏崑崙石床

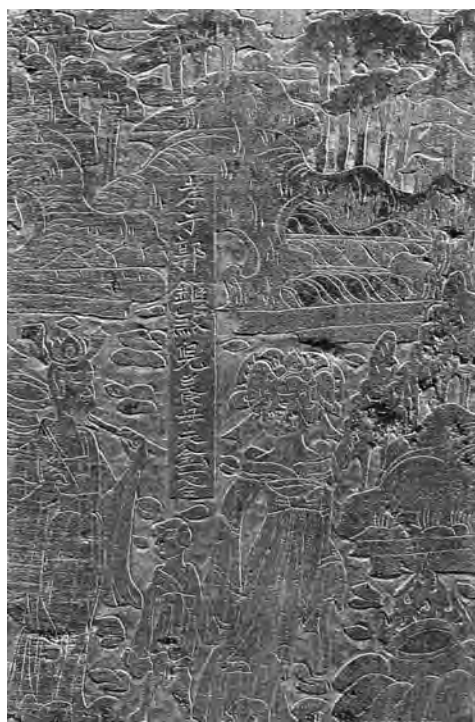
上記(1)―(19)の郭巨図は、孝子伝の郭巨の物語に従い、以下の①―⑥の場面のいずれかを描く。

- ① 供養（プロログ）
  - ② 道行
  - ③ 穴掘り、黄金
  - ④ 運搬
  - ⑤ 供養（大団円1）
  - ⑥ 官の黄金返還（大団円2）
- 孝子伝、さらに二十四孝の郭巨図として有名なのが③穴掘り、黄金の場面で、(1)(8)(9)及び、(15)(17)(18)の七例は、③を単独の郭巨図とする。また、⑤供養（大団円1）を郭巨図とするものも、三例ある(3)(7)(11)。但し、(7)には黄金が描かれない。残る九遺品は、全て二連以上の複雑な構成を持つ郭巨図で、③⑤を二連とするもの(6)(12)(16)。但し、⑤に黄金なし、①③を二連とするもの(14)（本図）、①②④③を



三(四)連とするもの(2)、③④⑤を三連とするもの(4)(5)。但し、(5)の⑤に黄金なし)、④⑤⑥を三連とするもの(19)、①―⑥を六連とするもの(13)。但し、⑤に黄金なし)など、多様な展開を示すに到っている。小稿では、上記(1)―(19)の郭巨図の内、新出の(12)―(19)八図の紹介を中心に、本図(14)の出現が提起する、研究上の課題を略述してみたい。

まず③穴掘り、黄金の場面を描く、新出の四図を紹介する。図十は、(15)ヴァージニア美術館蔵北魏石床左側板右に描かれた郭巨図(題記「孝子郭巨殺兒養母天金一釜」)、図十一は、襄陽南朝墓画像甁の郭巨図三図(1賈家冲M1、2清水溝M1、3柿庄M15出土)を示したものである(1は、一九八四年に出土したものが『江漢考古』86・1)、今般原石の写真が公開されたので、併せ示す。図十は、画面右下に黄金の釜、その左に、妻と子(共に右向き、左へ振り返る)、左手で肩に甬を担ぐ郭巨(右向き)を描く。掘り出された黄金の釜が描かれている所から、③穴掘り、黄金の場面と解されるが、三人が右へと歩む様子からは、④運搬の場面を兼ねたものと見做すことも可能である。もしそのように見做すならば、図十の三人は後述、(13)呉氏蔵北魏石床脚部の郭巨図④(2)及び、呉氏蔵北魏崑崙石床の郭巨図(A)(4)などと酷似するのであって、当図の極めて複雑な成立事情を示すものとなるだろう。図十一1は、画面右に、両手に握った甬に右足を掛ける郭巨(左向き)、中央下に、黄金の釜、左に、子供を抱いて立つ妻(右向き)を描く。2、3は、その左右を反転させたものとなっている。それらは、一九五七年に出土した鄧県彩色画像甁(榜題



図十 ヴァージニア美術館蔵北魏石床(郭巨)

「金老釜」「郭巨」。但し、文字が裏返る)と一系の、稀少な南朝の郭巨図である(図像配置は2、3と同じ)。

次に、新出二連の郭巨図(12)、(16)と共に紹介する。図十二は、(6)C.T.100旧蔵北魏石床正面右板右、中央の郭巨図(題記(A)「孝子郭巨」)、(B)「孝子郭巨天賜黄金」)、図十三は、(12)呉氏蔵北魏石床上の郭巨図(題記(A)「孝子郭巨殺兒養母」)、(B)「孝子郭巨」)、図十四は、(16)安陽固岸東魏石床正面左板左、中央の郭巨図(題記(A)「郭巨夫妻埋兒天賜黄金与之」)、(13)「孝子郭巨丑祠孫兒時」)を示したものである。これら三図は、いずれも③穴掘り、黄金、⑤供養(大団円1)の二つの場面を、二連の郭巨図とする。図十二(A)は、画面中央に、両手で握った甬に左足を掛ける郭巨、左に子供を抱いて立つ妻を描く(共に右向き)。甬の下に見えるのが黄金の釜である。(B)は、画面右に、牀上



1



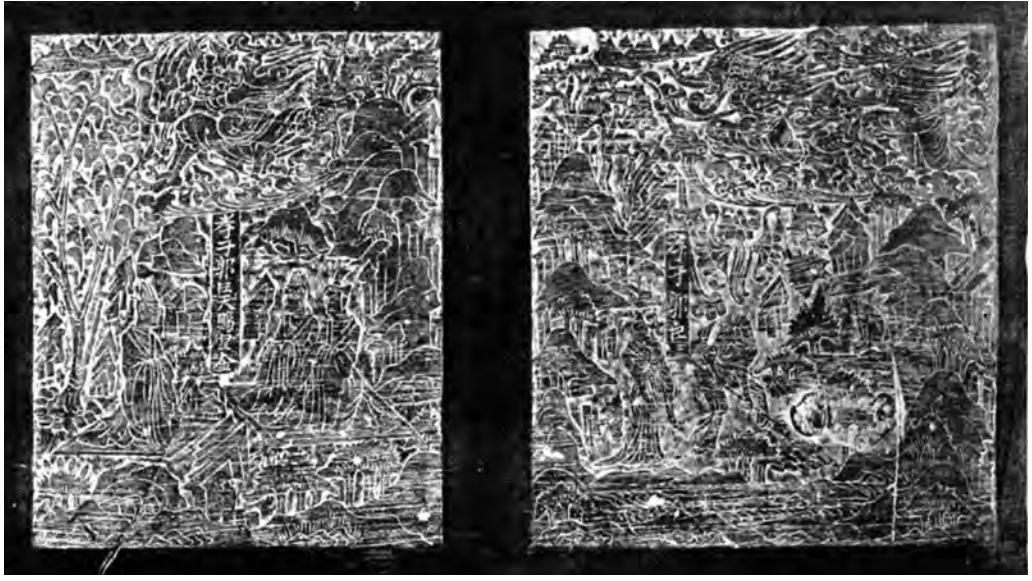
2



3

図十一 襄陽南朝墓画像象甕（郭巨。1 賈家冲M1、2 清水溝M1、3 柿庄M15出土）





(B)

(A)

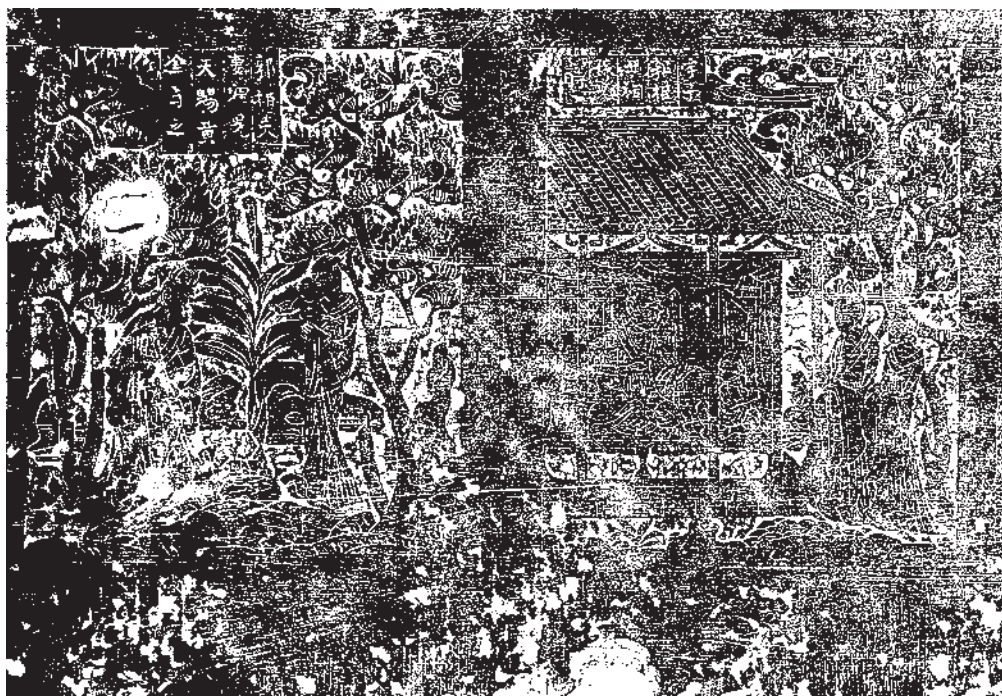
図十二 C・T・Loo 旧蔵北魏石床 (郭巨)



(B)

(A)

図十三 吳氏蔵北魏石床 (郭巨)



(A)

(B)

図十四 安陽固岸東魏石床（郭巨）

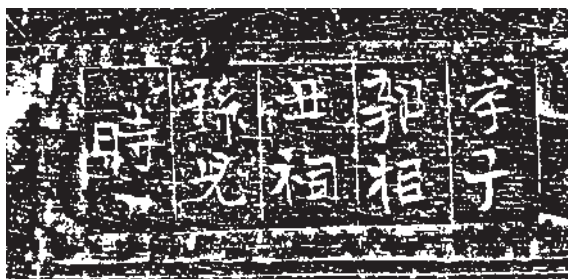
に並んで拱手し跪く妻と郭巨（共に左向き）、左に、牀上に拱手して坐す母（右向き）を描く。母を誤って男形とし（冠を被る）、黄金、子供は見当たらないようである。図十三(A)は、画面右に、子供を抱いて立つ妻（左向き）、左に、両手で握った甬に左足を掛ける郭巨（右向き）、甬の右に黄金の釜を描く。(B)は、画面右に、左を向いて立つ郭巨と妻、左に、屋内に坐す母（右向き）と子供（左向き）を描く。

黄金の釜は描かれていない。当図の二つの題記が陽明本孝子伝——線部の直接的引用と見られることは、当石床の董黯図（図六）のケースに同じい。図十四(A)は、二〇〇七年に河南省安陽県の固岸墓地II区M57から出土した、(16)安陽固岸東魏石床の郭巨図で、当石床は、東魏武定六（五四八）年謝氏馮僧暉の墓誌などを伴う、また、ソグドとの関連が指摘される、貴重な遺品である<sup>(26)</sup>。さて、図十四(A)は、図十三(A)と酷似することに注目しなければならない。(B)における郭巨夫婦の位置が入れ替わる等の小異はあるが、(A)に描かれる子供の様子を始めとして、草木に到るまで、図十四は、図十三と殆ど瓜二つなのであり、両者が同じ粉本から出ていることを窺わせる、恰好の例となっている。加えて、(12)と(16)との二遺品には、馬や牛、侍者の図像などにも酷似するものがあり、一両遺品の考古学、美術史的な比較検討は、なお今後の重要課題となるだろう。図十四(B)は、図十三(B)との対比から、⑤供養（大団円1）の図像と見てほぼ間違いないが（黄金の釜は、やはり見えない）、問題は、その題記、

孝子郭巨、丑祠孫見時<sup>(12)</sup>

である（図十五）。この題記は、後半が頗る難解で、陽明本孝子伝等





図十五 郭巨冢(B)題記

に見当たらない内容となっている。仮に、

孝子郭巨、丑祠孫兒時

(孝子郭巨、祠を丑むる孫兒の時)

と訓読すれば、その祠とは、例えば有名な山東省の孝堂山石祠のことではないかと思われる。孝堂山石祠には早くから、それを「郭巨之墓」「孝子之堂」とする伝承があり、北斉の隴東王胡長仁が武平元(五七〇)年に当地を訪れ、孝堂山石祠の西壁外側に感孝頌を刻していることは、これも周知の事実である(図十六。胡長仁に関しては、北斉

書四十八、北史八十に伝が載る)。この事実から北魏末以前には、孝堂山石祠を郭巨の墓、孝子の堂などとする伝承の流布していたことが知られるが、当題記は、そのことに言及したものであろう。無論、当題記は、図十四(B)の図柄とは一致しない。題記と図柄とのずれは、決して珍しくはないが(図三参照)、郭巨冢の粉本として、郭巨物語の画卷一卷が想定されるとするならば、その画卷末辺りに、郭巨の子孫による祠堂建立場面の存したことは、十分に考えられることである。



図十六 胡長仁の感孝頌

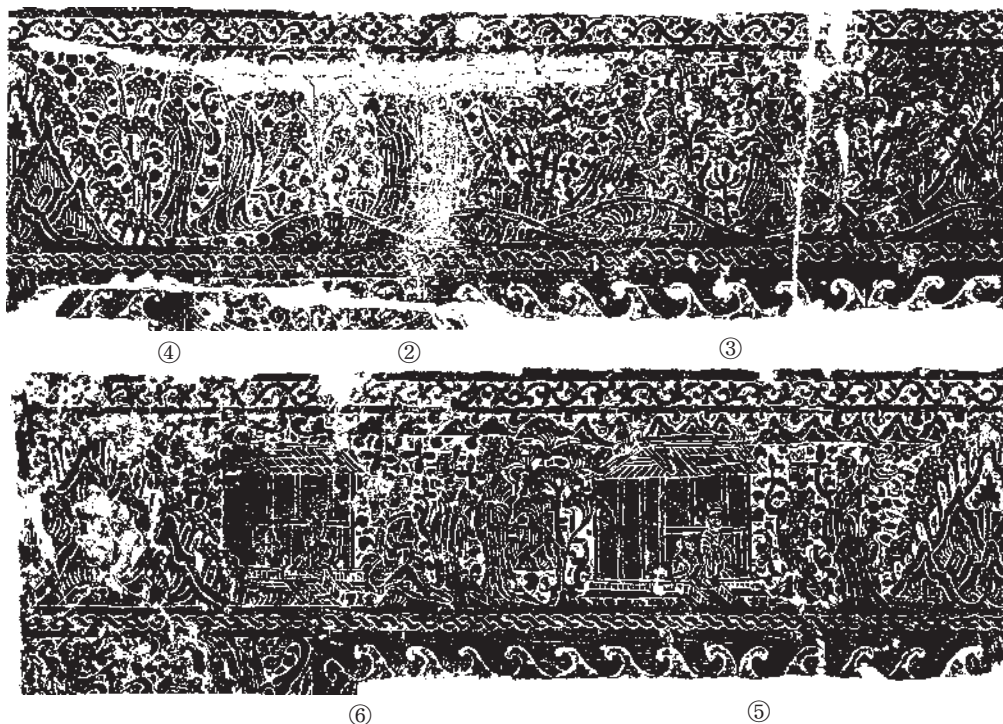
四

次に、三連以上の郭巨図として、四例の遺品が数えられ(2)、(4)(5)、(19)、(13)〈六連〉、その内の二例が新出の遺品である(13)、(19)。そもそも二〇一二年三月、深圳博物館において(12)呉氏蔵北魏石床(図十三、また、図六)と共に、私が目睹したのが(13)呉氏蔵北魏石床脚部であった(図十七)、その折に私が仰天したのは、(13)が、

(一)石床前脚部分に孝子伝図の描かれる初例であること。  
(二)六連図であり、しかもその全てが郭巨図であること。

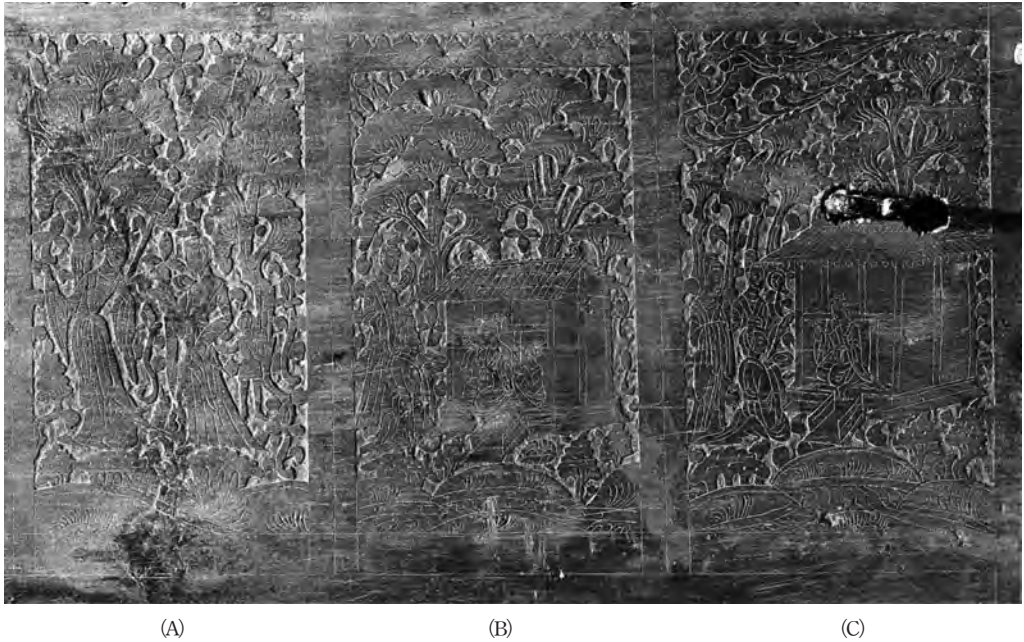
の二点においてであった。石床囲屏部分に描かれた孝子伝図は、これまで幾つも見えて来たが、それが前脚部分にも描かれ得ることは、その時私の始めて知った事実である。また、三連以上の孝子伝図が描かれたことは、例えば一九八一年に出土した寧夏固原北魏墓漆棺画(2)の左側上欄に、八連の舜図が現存することから、十分あり得ることは予想されたものの、何分孤例に留まることを難としたが、(13)の出現は、そのことの証明を意味すると同時に、画面を区切る三角形の山型が、(2)(13)両者の深い関係を示していたことは、私を心底驚かせたのである。(13)の郭巨図については、一昨年の拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」において紹介したので、具体的な事柄に関しては、そちらに譲り、ここでは、本図(図九(14))と、新出の(13)、(19)の郭巨図との関連を考えてみる。

図十七は、(13)呉氏蔵北魏石床脚部の郭巨図②―⑥の五場面を掲げたものである(③の右にある①を省略)。(13)の数ある特色の中で、例え



図十七 呉氏蔵北魏石床脚部(郭巨)





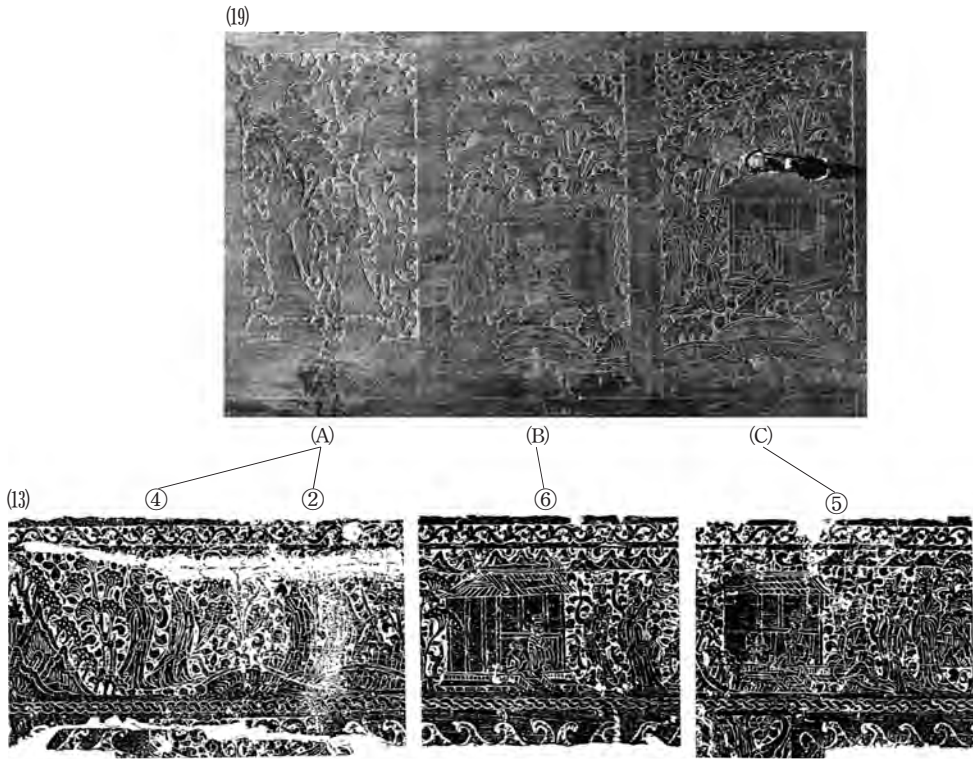
図十八 吳氏藏北魏崑崙石床 (郭巨)

ば⑥官の黄金返還(大団円2)の場面が、始めて知られたことなどは、その最たるものと言えようが、なお吳氏の蒐集品には、⑥の場面を有する遺品がある。図十八は、(19)吳氏藏北魏崑崙石床(仮称)の正面右板、左端の男性墓主像から続く、郭巨図(A)(B)(C)を示したものである。<sup>31)</sup> (A)は、画面左から、甬を肩に振り返る郭巨、子供の手を引く妻及び、子供を描く(共に左向き)。 (B)は、立っている妻、跪いて黄金の釜を捧げる郭巨(共に右向き)、屋内に坐す母と子供(共に左向き)を描く。 (C)は、画面左奥に立つ郭巨夫婦と、その前に黄金を捧げる官人(共に右向き)、屋内に坐す母を描く(左向き)。さて、図十八(A)(B)(C)が、図十七④(2)⑤⑥の三場面对応することは、(19)(13)両者の三場面構図が、左右こそ反転しているものの、殆ど同じであることから明らかである(図十九)。即ち、図十八は、

(A)——④運搬(ないし、②道行)  
(B)——⑤供養(大団円1)  
(C)——⑥官の黄金返還(大団円2)

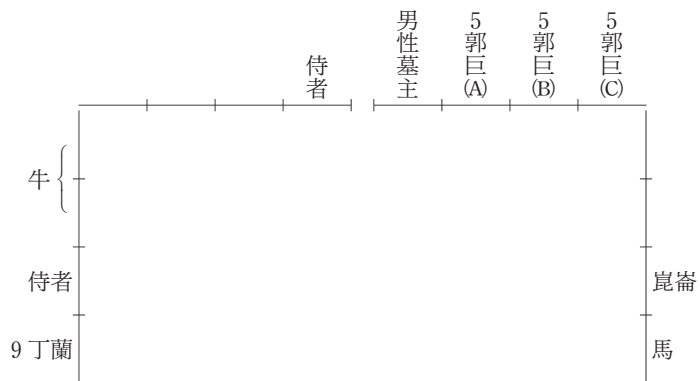
の三場面を描いたものであることが確定出来る。また、前掲図十、(15)ヴァージニア美術館藏北魏石床の郭巨図の図柄が、④運搬の場面に外ならないことも、図十八(A)や図十七④(2)との比較から、具体的に確認することが出来る。

ここで、(19)吳氏藏北魏崑崙石床のことに、少し触れておく必要がある。当石床は現在、四枚の囲屏、一對の石闕、前脚の五点から成っており、一枚の囲屏をそれぞれ四面に区切る、新出の遺品である。右側板の右から二番目の侍者図として、珍しい崑崙圖像が描かれている所



図十九 (13)と(19)の対照

から、それを当石床の仮称とした。図二十は、当石床の内容を、概念図化して示したものである。図十八の郭巨図(A)(B)(C)は、正面右板に描かれるが、当石床の左側板には、もう一図の孝子伝図が描かれており(図二十一左)、それは、9丁蘭図であろうと思われる。画面左に立つのが丁蘭、屋内に坐すのが木母である(共に右向き)。図二十一右は、侍者であろうが、或いは、見方によっては、図二十一の二面を一連として、例えば郭巨図の①供養(プロログ)の場面と見えないこともなく、再考を期したい。ところで、図二十を見ると、当石床には聊か奇異な点が幾つかあることに気付く。目立つのは、例えば男性墓主像(正面右板左)と対になる、女性墓主像がないことである(正面左板右)。また、馬(右側板右)と対になる、牛が通常の位置からずれており(左側板右半)、しかも馬が一面しか占めないのに、牛は二面に互っていることである。さらに郭巨図三面と対になる、正面左板の三面は、孝子伝



図二十 吳氏藏北魏崑崙石床の内容

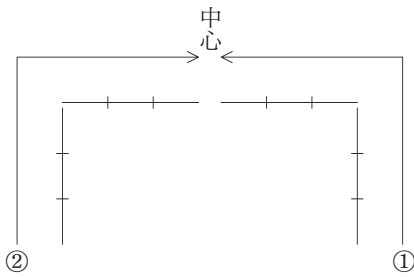




図二十一 吳氏藏北魏崑崙石床 (左、丁蘭)

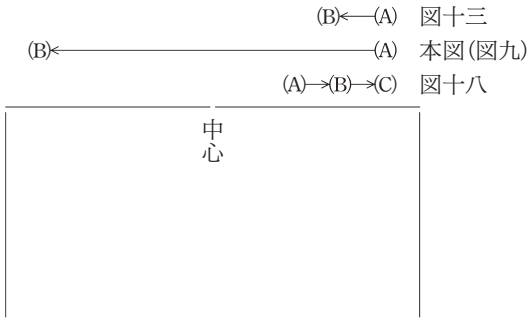
図でなく、暴虎馮河等の図(詩經小雅小旻に基づく)となつてゐることなどである。<sup>(33)</sup> これらの点から考えると、現存(19)吳氏藏北魏崑崙石床の囲屏四枚は、一組のそれとは認め難く、二組以上のそれが組み合わされたものと判断されよう。さらに釘穴からは、左右の側板の位置は合つてゐるが、正面左板は右板であつた可能性が高いだろう。それはともあれ、例えば(19)吳氏藏北魏崑崙石床の、男性墓主の右に描かれた郭巨図(A)(B)(C)(図十八)が、一組の石床の正面右板のものであることは、間違いない。実はそこに、石床囲屏の孝子伝図配列をめぐる、大きな問題が横たわる。

北魏時代の石床囲屏に描かれた、孝子伝図の配列について、林聖智氏は、平成十五(二〇〇三)年の「北朝時代における葬具の図像と機能―石棺床囲屏の墓主肖像と孝子伝図を例として―」と題する論攷において、画期的な説を提唱された。<sup>(34)</sup> その説は、まず囲屏図像の中心を男性(右)、女性墓主(左)の肖像とし、馬(右)と牛(左)を伴うとするものである(図二十二)。そして、囲屏に描かれる孝子伝図は、陽明本孝子伝の順序(目次配列)に従つて、右の外側から中心(男性墓主)へ、次いで左の外側から中心(女性墓主)へと配置される、と言ふものである(図二十二の矢印①、矢印②)。さらに林氏は、時代の変



図二十二 孝子伝図配列概念図

遷により、まず墓主肖像が省略されて、馬と牛とが象徴的にその代理を努めるものの、最終的には馬と牛も省略されることになる、とされている。その林聖智説は、孝子伝図の研究史上、画像配列の基本原則を明らかにしたものとして、大きな意義を持つものである。特にその画像配列において、日本にのみ伝存する完本孝子伝の目次配列が、深く関連しているという、氏の指摘は、従来の研究史の空隙を埋める視点として、高く評価されなければならない。さて、その林聖智説を念頭に置いて、例えば図十八(19)や本図(図九、14)などの郭巨図を眺める時、深刻な問題が惹起されることに気付くであろう。



図二十三 郭巨図の配列順序

例えば図十八(19)の郭巨図(A)(B)(C)は、林氏の言うように中心(男性墓主)へと向かうのではなく、逆に中心から離れる方向へと展開している。さらに本図(図九、14)の郭巨図(A)(B)は、なお林聖智説とは合致せず、中心の両墓主肖像を飛び越えて、二枚の正面板の右端から左端へと展開している(図二十三)。また、例えば図十三(12)の郭巨図(A)(B)の場合、林聖智説に基づいて(B)を⑤供養(大団円)と見れば、(A)(B)の順となるが、黄金の釜が描かれていないなど、(B)を①供養(プロローグ)

と見るならば、順序は(B)(A)となつて、図十八(19)と同じケースとなり、やはり中心(男性墓主)から外側へ展開するものとなるだろう。そして、当石床(12)の女性墓主の左には13老萊子、37董黯の図が続くから、当石床の孝子伝図配列は、中心へと収束するのではなく、周辺へと拡散する配置を取るものと見做され、林聖智説の再検討を余儀なくするのである。図十八(19)や本図(図九)、図十三(12)など、新出の郭巨図の配列と、林聖智説との関係をどのように捉えるべきか、ヒントの一つは、例えば本図の東魏武定元(五四三)年の年紀にあるように思われる。林聖智説は、北魏時代の孝子伝図配列を考える基本原理として、おそらく正しい。但し、北魏時代末期、東魏から北斉にかけて、その基本原理に変質が齎され、例えば墓主に収約される孝から、墓主より子孫などへと拡散する孝への、孝子伝図の捉え方の変遷があったのではないか。すると、今回検討した郭巨図を含む新出(12)の遺品において、(12)呉氏蔵北魏石床の左半(正面右板)が、  
女性墓主↓13老萊子↓37董黯  
(13)ヴァージニア美術館蔵北魏石床の右半が、  
男性墓主↓2董永↓9丁蘭↓11蔡順  
(16)安陽固岸東魏石床の右半(正面右板)が、  
男性墓主↓4韓伯瑜↓9丁蘭  
など(図十四(A)(B)も、(B)を①供養(プロローグ)と取れば、(B)↓(A)の可能性が出て来る)、墓主から外側へと、孝子伝図の拡散する例が目につくのである。或いは、このことは、言わば孝の觀念が墓主へ集約される林聖智説に対し、北魏末期ないし、東魏以降、孝の觀念が墓主



から子孫へと拡大する(図十五題記)、孝子伝図配置の捉え方の変容があつたことを、示唆するのかもしれない。いずれにしても、本図(図九)を含む、(14)を始めとする、(12)(13)(19)などの呉氏藏遺品が、今後の孝子伝図研究にとって、新たな展開と深化を齎す、不可欠の資料であることは、上に記した一端の事実からも、窺い知ることが出来よう。

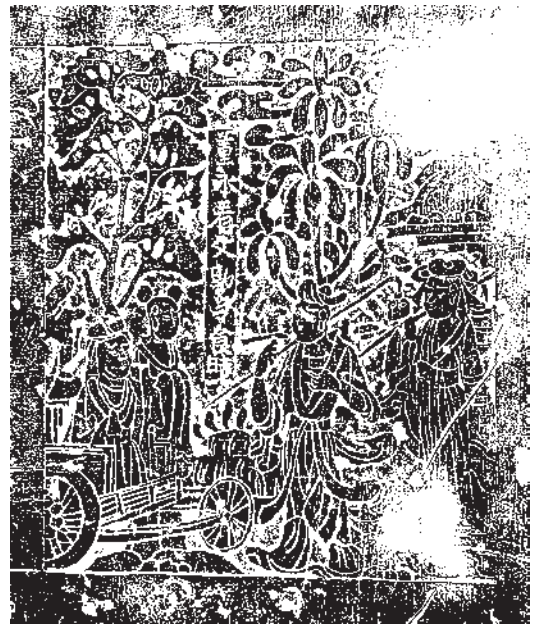
## 五

図二十四は、翟門生石床の左側板右に描かれた董永図を示したものである。題記に、

董永看父助与食時

とある(後述)。画面の右から二人目に、右肩に鋤すくを担いで立つ董永(左向き)、四人目に、三輪の車上に坐る父(右向き)を描く。右から一人目の、右肩に棒を担いで立つ女性(左向き。棒に食器を提げているらしい)と、三人目の、拱手して立つ双髻の子供(右向き)は、侍者であろう。本図の基となった、陽明本孝子伝<sup>2</sup>董永の本文を示せば、次の通りである。

楚人董永(蕙)至孝也。少失母、独与父居。貧窮困苦、傭賃供養其父。常以鹿車載父、自随。着陰涼樹下。一鋤一廻、顧望父顏色。供養蒸々、夙夜不懈。父後寿終、无錢不葬送。乃詣主人、自売(賣)為奴、取錢十千。葬送礼已畢。還売主家、道逢一女人。求為永妻。永問之曰、何所能為。女答曰、吾一日能織絹十疋。於是、共到売主家。十日便得織絹百疋。用之自贖。々



図二十四 翟門生石床(董永)

畢、共辞主人去。女出門語永曰、吾是天神之女。感子至孝、助還売身。不得久為君妻也。便穩不見。故孝經曰、孝悌之志、通於神明。此之謂也。贊曰、董永至孝。売身葬父。事畢无錢。天神妻女。織絹還売。不得久処。至孝通靈、信哉斯語也

董永図は、漢代より非常に人気の高かった、孝子伝図の一つに数えられる。これまで管見に入ったその図像としては、次のようなものがある。

- (1) 後漢武氏祠画像石(武梁祠)
- (2) 和林格爾後漢壁画墓
- (3) 泰安大汶口後漢画像石墓

- (4) 中岳漢三闕啓母西闕
  - (5) 渠県蒲家湾無名闕
  - (6) 樂山柿子湾Ⅰ区Ⅰ号墓
  - (7) 渠県蒲家湾無名闕
  - (8) 江蘇徐州仏山画象石墓
  - (9) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
  - (10) ポストン美術館蔵北魏石室
  - (11) C. T. Loo 旧蔵北魏石床
  - (12) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床
  - (13) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶
- 右の(1)―(13)の内、(1)―(8)が後漢時代、(9)―(12)が北魏期、(13)が唐代のものである。その後、本図を含め、次の七例の董永図の存在が知られるに到っている。
- (14) 樂山麻口Ⅰ区Ⅰ号墓
  - (15) 樂山麻口Ⅱ区40号墓
  - (16) 樂山柿子湾Ⅱ区22号墓
  - (17) 濟南長清大街1号墓
  - (18) 臨沂呉白荘画象石
  - (19) 呉氏葳翟門生石床（本図〈図二十四〉）
  - (20) ヴァージニア美術館蔵北魏石床
- (14)―(18)が後漢、(19)―(20)が北魏のものである。(14)―(16)は、唐長寿氏の報告<sup>36)</sup>、(17)―(18)は、肖貴田氏の報告にそれぞれ掛るものである。そもそも董永図をめぐっては、(1)武梁祠のそれに、董永と天女との間の子（董仲）が

描かれているとし、(9)―(10)のそれに、父の生存中に天降った天女が描かれていることなどを根拠に、

董永の説話にしても、元来は靈芝篇に詠まれたように、董永が父に孝養をつくす為に起きた借財の為に困苦してゐたところ、天から織女が降つて機織によつて借財償却を助けたといふ伝説があつたものを、その孝行を誇張する為に織女下降の原因として父の歿後葬式の費用に困つて身を奴に売つてその葬式を終へたといふ孝行実施に伴ふ困難さを誇張し補填したものと思はれる。そしてこの誇張し補填された伝承と元来の伝承との二の伝承がある時期には並んで伝はつたが、やがて元の型のものが失はれたものと思ふと主張する、西野貞治氏による、優れた仮説が早くから存し<sup>38)</sup>（「董永伝説について」、その西野説をどう扱うかということが、董永図研究における、目下の喫緊の課題となつている。西野説は、(1)―(9)―(10)の董永図の内容を根拠として、陽明本孝子伝など売身譚を含む董永物語を、後世の誇張、補填によるものと見、董永が孝養を尽くす父の存命中に、織女が天降つて助けるといふ物語の形を、その原型に措定するものである。その説は、非常に魅力的なものながら、西野説の難点は、例えばその根拠となる最古の文献が魏、曹植の靈芝篇（宋書樂志等所収）とされていることだろう。靈芝篇は、鞞舞歌五首中の一首であり（曹植集二）、韻文なのであつて、もとより孝子伝ではない。その文言には当然、省略や改変が十分に想定される。曹植の読んだ孝子伝に、父の死亡や董永の売身が書かれていなかったとは、一概に断言出来ない。靈芝篇の当該条は、例えば陽明本孝子伝のそれによつても、無理なく



解釈し得る。また、西野説の難点は、根拠とされた図像が、僅か三点(1)(9)(10)に過ぎないことである。西野論文当時(昭和30年)においては、止むを得ないことだが、現在その図像数は、二十点もの多きに達し、その数は、今後もお増え続けるであろう。孝子伝図の董永図に発する西野説であれば、董永図によつてそれを再吟味すべきは、私達に課せられた使命とも言える。このことは、また機会を改めて述べべく、ここでは、新出の(20)を紹介するに留めたい。

図二十五に掲げるのは、(20)ヴァージニア美術館蔵北魏石床正面右板中央に描かれた董永図である(題記「此是董永看父助時」)。図は、画面右下に、右手で杖を持って二輪車の上に坐す父(左向き)、左下に、両手で鋤を握つて父の方(右)へ振り返る董永を描く。当図また、本図(図二十四)の父の頭上に、銀杏が茂るのは、陽明本孝子伝に、



図二十五 ヴァージニア美術館蔵北魏石床(董永)

常以鹿車載父、自隨着陰涼樹下

と記されることを表わし、また、当図の董永が土を耕しながら(題記の助は、鋤の音通)、父を振り返っていることも、陽明本に、

一鋤一廻、顧望父顔色

とされることの、忠実な図像化に外ならない。当図の特徴は、例えば画面中に、董永と父との二人しか描かれておらず(侍者へ女性、子供等)が見え、例えば陽明本孝子伝とよく一致する点にある。同様の例としては、(2)、(4)―(8)(8は父のみ)、(11)、(14)―(16)などが上げられるが(但し、北魏時代の例は、(11) C. T. Loo 旧蔵北魏石床のみ)、このことは勿論、西野説の当否と深く関わり、今後の慎重な検討を要する。

ところで、本図(図二十四)の題記、

董永看父助与食時

は、――線部が特異で、その題記は、本図の内容を、董永が父の食事を助ける場面と見做したことから、出たものと考えられる。図中の董永も、土を耕している訳ではないので、その「助」字は、鋤の意味を失っているらしい。このように、題記中に「食」字が加わる現象が、同じ翟門生石床の郭巨図(図九A)、また、ヴァージニア美術館蔵北魏石床の董黯図(図七)にも、共通して見られることは、既述の如くだが、実は、同じヴァージニア美術館蔵北魏石床の丁蘭図(正面右板中央)の題記にも、

丁蘭待木母食時

などとあつて(図像も、木母に食事を供する図。先縦は、襄陽賈家沖

画像軀墓などに見える）、このことは、ヴァージニア美術館蔵北魏石床の制作時期が、翟門生石床の東魏時代であることを、強く示唆する。

〔付記〕 貴重な翟門生石床囲屏の全貌を、世界に先駆け、日本において紹介することをお許し下さった、深圳市金石芸術博物館理事長の呉強華氏、本石床について種々の御教示を惜しまれなかった、中国社会科学院考古研究所の趙超教授に対し、心から御礼申し上げます。なお小稿は、平成28年度科学研究費補助金基盤研究(B)による成果の一部である。

〔注〕

- (1) 趙超氏「介紹胡客翟門生墓門志銘及石屏風」(榮新江、羅豐氏『粟特人在中国 考古發現与出土文獻的新印証』〈科学出版社、二〇一六年〉下所収)。同上論文には、本石床の墓門誌全文が録され、男性墓主図下題記(折込図版三、中央参照)との関係も述べられる等、参照を乞いたい。なお翟門生がソグド人であることなど、別稿を用意する。
- (2) 長廣敏雄氏『六朝時代美術の研究』(美術出版社、昭和44年) 図版1—8及び、一章参照。
- (3) 長廣氏注(2)前掲書図版17—28及び、五章参照。
- (4) 拙稿Ⅰ「董黯贅語—孝道と復讐(一)—」(拙著『孝子伝図の研究』〈汲古書院、平成19年。初出平成14年7月〉II—3)。
- (5) 拙稿Ⅱ「呉強華氏藏新出北魏石床の孝子伝図について—陽明本孝子伝の引用—」(『京都語文』24、平成28年12月。小稿の黄盼昉氏による中国語訳「関于深圳博物館展陳北魏石床的孝子伝圖—陽明本孝子伝的引用」が、趙超、呉強華氏『永遠的北朝 深圳博物館北朝石刻芸術展』〈文物出版社、二〇一六年〉に収められる)。
- (6) 拙稿Ⅲ「董黯図攷—吳氏藏北魏石床(二面)の孝子伝図について—」(『佛教大学文学部論集』100、平成28年3月)。
- (7) 陽明本孝子伝の本文は、『幼学の会』『孝子伝注解』(汲古書院、平成15年)に拠る。

- (8) 図三は、中国美術全集絵画編19石刻線画(上海人民出版社、88年) 図六、図四は、長廣氏注(2)前掲書、図版54—56に拠る。なお(2)ミネアポリス美術館蔵北魏石棺の董黯図については、注(4)、(5)前掲拙稿Ⅰ、Ⅱを参照されたい。
- (9) 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」(『人文研究』7・6、昭和31年7月)。
- (10) 長廣氏注(2)前掲書。
- (11) 長廣氏注(2)前掲書九章。
- (12) 長廣氏注(2)前掲書八章117、118頁。
- (13) 注(4)前掲拙著Ⅰ—24、三節参照。
- (14) 図五は、呉氏提供の拓本写真に拠る。
- (15) 図六は、趙超、呉強華氏注(5)前掲書図版149頁に拠る。
- (16) 図七は、Gisele Croës, Ritual Object and Early Buddhist Art (New York, 2004), Stone funerary bed B2に拠る。なお(6)ヴァージニア美術館蔵北魏石床の董黯図即ち、図七は、拙稿Ⅲの表二(26頁上)で言えば、王奇による母への三牲強要を単独で扱う、一連の図像として、その三段目、拙稿Ⅲにおける図一、図四に付け加えられるべきものとなる。
- (17) (6)ヴァージニア美術館蔵北魏石床の孝子伝図が、このような傾向、特徴を持つことについては、拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷—吳氏藏北魏石床(二枚)の連れの出現—」(関西大学『国文学』101、平成29年3月予定)においても論じた。
- (18) 西野氏注(9)前掲論文。
- (19) 長廣氏注(2)前掲書九章204頁。
- (20) 図十は、注(16)前掲書 Stone funerary bed A3に拠る。
- (21) 図十一は、『天国之享—襄陽南朝画像彫刻芸術』(科学出版社、二〇一六年) 図版五「歴史故事」140、141、142頁に拠る。
- (22) 図十二は、C. T. Loo & Co, An Exhibition of Chinese Stone Sculptures (New York, 1940) Plate XXIX (Catalogue No. 36)に拠る。
- (23) 図十三は、呉氏提供の拓本写真に拠る。



(24) 図十四は、安陽博物館提供の写真に拠る。

(25) 注(5)前掲拙稿II参照。

(26) 注(17)前掲拙稿参照。

(27) 図十五は、安陽博物館提供の写真に拠る。

(28) 図十六は、山東省石刻芸術博物館、長清県文物局『山東長清孝堂山漢石祠画像』(齊魯書社、二〇〇一年)「隴東王感孝頌」に拠る。参考までに、胡長仁感孝頌の本文を示せば、次の通りである(関野貞氏「支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾」へ『東京帝国大学工科大学紀要』

8・1、大正5年3月)二甲所収による)。

惟夫徳行之本、仁義之基、感洞幽明、擾馴禽獸、清音帶氷而挺潔、素采映雪而流輝、根矩定於一丸、丘吾絶於三失、開府儀同三司尚書右僕射尚書左僕射尚書令撰選新除特進使持節齊州刺史隴東王胡長仁、雖黃雅俗、雄飛威里、入膺北斗、執柄端衡、出牧東秦、摠條連率、未脱崔林之屣、聊留賈琮之襜、視聽經過、訪詢耆旧、郭巨之墓、馬鬣交阡、孝子之堂、鳥翅衝阜、君王愛奇好古、歴覽徘徊、妃息在傍、寶僚侍側、壁疑秦鏡、炳煥存形、柱識荆珉、寂寥遺字、所以歛眉長歎、念昔追遠、遂若羊公登峴、還同処墨飲泉、慨賢勝之多弊、嗟至徳而無紀、蘭溪儻不見松、穀城何以知石、于時開府中兵參軍梁恭之盛工篆隸、騎兵參軍申嗣邕徵學摛藻、並応命旨、俱營頌筆、以大齊武平元年正月廿二日、權輿雕篋、表建庭宇、棟刻蒼文、檐栽翠柏、庶令千葉之下弥振金声、九原之中恒浮玉樹、其詞曰、

天經地義、啓聖通神、重華曾閔、萊子榮春、時多美迹、世有芳塵、前漢逸士、河内貞人、分財双季、独養耆親、客舍凶頑、兕埋福臻、穹隆感異、旁薄貽珍、懸車遽落、夜台弗晨、千齡俄古、万祀猶新、朱驂紫蓋、撫俗調民、高山遠節、景慕繁頌、式憑不朽、永播衣巾、

感孝頌の「前漢逸士」以下に言及される郭巨譚は、劉向孝子図(太平御覽四一一、法苑珠林四十九等所引)系統のそれであり(二十卷本搜

神記23にも見える)、また、感孝頌中に羊公、重華、曾參、閔子騫、老萊子、榮正子春などへの言及が見えることは、何らかの孝子伝が参照されたことを示す、興味深い事実を外ならず、なお今後の検討が俟たれよう(郭巨の物語の成立と感孝頌の関連を論じたものに、橋本草子氏「郭巨」説話の成立をめぐって」へ『野草』71、平成15年2月)がある)。

(29) 拙稿「郭巨図攷―吳強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」

(『佛教大学文学部論集』98、平成26年3月。(13)は、趙超、吳強華氏注(5)前掲書図版133―137頁に、拓本と原石写真が収められている。

(30) 図十七は、趙超、吳強華氏注(5)前掲書図版133頁に拠る。

(31) 図十八及び、後掲図二十一は、吳氏提供の写真に拠る。

(32) 近時知られるに到った丁蘭図として、吳氏蔵北魏石床(三枚)や、ヴァージニア美術館蔵北魏石床、安陽固岸東魏石床などに収めるものがある。それらの丁蘭図については、注(17)前掲拙稿を参照されたい。

(33) 当図については、雋雪艷氏が論文を執筆される予定である。

(34) 林聖智氏「北朝時代における葬具の図像と機能―石棺床囲屏の墓主肖像と孝子伝図を例として―」(『美術史』154へ52・2、平成15年3月)

(35) 林聖智説については、注(4)前掲拙著I・2・3を参照されたい。

(36) 唐長寿氏「梁山崖墓画像中の孝子図釈説」(『長江文明』5、二〇一〇年6月)。なお(15)については、同氏「梁山崖墓和彭山崖墓」(電子科技大學出版社、93年)附録136―137頁に早く指摘がある)。

(37) 肖貴田氏「漢至南北朝時期董永故事及其圖像的嬗変」(『東方考古』7、二〇一〇年12月)

(38) 西野貞治氏「董永伝説について」(『人文研究』6・6、昭和30年7月)

(39) 図二十五は、注(16)前掲書Stone funerary bed C2に拠る。

(40) 注(17)前掲拙稿参照。

(くらだ あきら 日本文学科)

二〇一六年十一月十五日受理